OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大阪方言の文末詞デとワ
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2011, 9, p. 30-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/23214
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第9号（2011年1月）30-45

大阪方言の文末詞デとワ

野間　純平

【キーワード】大阪方言、文末詞、命題めあてのモダリティ、聞き手めあてのモダリティ

【要旨】

本稿では、大阪方言の2つの文末詞デとワの意味・用法を記述した。その結果、次のことが明らかになった。

(a) デとワは命題のとらえ方について対照的な特徴を持つ。デは話し手が既に知っている、気付いていること、ワは話し手が発話時に気付いたこと、思い出したことについて伝える形式である。

(b) 聞き手への伝え方についてもデとワは対照的な特徴を持つ。デは聞き手から反応がきそうな発話を、聞き手に向けて伝える。一方、ワは聞き手の意図には関係なく、話し手が一方的に聞き手に伝える。

(c) デとワの共通点としては、平叙文でしか使えないことと、ナラティブにおける状況説明では使えないことが挙げられる。

1. はじめに

大阪方言には、次のように用いられる文末詞デとワがあり、共通語で言えばおおよそ「よ」に当たる意味で用いられる[1)]。本稿における例文は基本的に大阪方言だが、共通語訳が必要と思われる箇所にのみ訳をつける。議論の中心になる文末詞デとワの部分のみをカタカナで表記し、それ以外は漢字かな混じりで表記する。

(1) もう8時過ぎたデ。はよ起きや。

(2) 今からそっちに行くワ。

(1) と (2) はそれぞれ「もう8時を過ぎた」「話し手が今からそっちに行く」ということを聞き手に伝えようとする発話である。このようなデとワは、当該方言ではよく用いられる。本稿の目的は、この2形式の意味・用法を記述することである。では、なぜこの2形式をまとめて本稿で扱うのかというと、両者が意味の上で対照的だからである。詳しくは§5で述べるが、ここで簡単に示しておく。

デとワは、どちらも平叙文でしか使えない（§2参照）という統語的な特徴は共通しているものの、それが付加される命題を話し手がどうとらえているかという点に違いがある。

(3) A：会議は1時からやったっけ？

---

1) なお、当該方言には「ワイ」という形式も存在し（「ワイ」でひとつの形式なのか、「ワ」＋「イ」なのかについても議論の余地があるが）、ワとよく似ているが、(2) や (4) のような場合には「ワイ」が使えないなど、完全に置き換え可能というわけではないので、本稿では記述の対象から外す。

B：うん、そうや｛デ／#ワ｝。

(4) A：何食べる？

B：えーっと、じゃあ親子丼にする｛#デ／ワ｝。

例えば、(3) において、「会議は 1 時から」という情報は B にとって既知のことであり、その場で考えたり思いついたりしたことではない。既に持っている情報をそのまま A に与えただけである。この場合、デは使えるが、ワは使えない。一方、(4) では、「えーっと、じゃあ」という表現からもわかるように、B は「親子丼にする」ということを、その場で考えて決めている。この場合、ワは使えるがデは使えない。このように、デとワは、「話し手の認識と命題との関わり方」という点で対照的であるということがわかる。

さらに、デとワは、聞き手目当て性に関しても対照的であると言える。例えば、次の (5) (6) に示したように、ワは独り言で使えるが、デは使えない。

(5) (窓の外を見て独り言で)

あ、雨降ってきた｛#デ／ワ｝。

(6) あー、もうしんどい｛#デ／ワ｝。

そして、独り言でなくても、デは積極的に聞き手に向いているのに対して、ワは必ずしもそうではない。このことは、独り言の場合も含めて、§3 以降で詳しく述べる。

以上のように、大阪方言のデとワは、平叙文専用の文末詞という点は共通しているものの、意味の上で対照的であるため、それぞれを単独で記述するよりも、両者を対照させながら記述したほうが互いの特徴がわかりやすくなると考えられる。以上が、本稿でデとワを両方とも扱う理由である。なお、分析にあたっては、筆者 (1987 年大阪府八尾市生まれ、男性、現在まで外住歴なし) の内省を用いる。

本稿の構成は以下のとおりである。§2 ではデとワの形式的な特徴についてまとめ、§3 と§4 で、デとワの意味・用法を記述する。それを踏まえて、§5 で両者の異同を明らかにし、最後に§6 でまとめる。

2. 形式的特徴

2.1. 生起環境

デもワも、動詞述語文、形容詞述語文、名詞 (形容動詞) 述語文すべてで使える。名詞 (形容動詞) に後接する場合、コピュラのヤを介する。

(7) もう寝る｛デ／ワ｝。　【動詞文】

(8) 外寒い｛デ／ワ｝。　【形容詞文】

(9) 今日は珍しく静かや｛デ／ワ｝。　【形容動詞文】

(10) 明日は雨や｛デ／ワ｝。　【名詞文】

また、デもワも基本的に他の文末詞を後接しないが、ワの場合、文末詞のナが後接できる。また、デとワが共起することはない。

(11) 先行っとく｛デ／ワ／*デナ／ワナ｝。

(12) もう寝る｛*デワ／*ワデ｝。

2.2. 使用可能な文タイプ

冒頭で述べたように、デとワが使える文タイプは平叙文だけであり、疑問文や命令文などでは使えない。

(13) 俺、もう行く {デ／ワ}。　【平叙文】
(14) 誰が行くんや {*デ／*ワ}。　【疑問文】
(15) ほら、もう行こう {*デ／*ワ}。　【勧誘文】
(16) さっさと行け {*デ／*ワ}。　【命令文】

以上のように、デとワはその形式的側面がよく似ている。が、次節以降で述べるように、両者は意味・用法の面では対照的である。

3. デの意味・用法

ここからは、デとワの意味・用法を詳しく記述していく。本節ではデ、次の§4 ではワについて記述する。

まず、デの基本的な意味を (17) のようにまとめる。

(17) デは、
　a. 当該命題の内容が話し手にとって「自明」のことであり、
　b. それは聞き手が認識するべきものである
　ということを表す形式である。

ここで重要なのは、(17) においてaとbで示した2点である。(17) の表現では説明が不十分なので、次の§3.1 と§3.2 でそれぞれについて詳しく述べる。そして、§3.3 で、デが使えない場合について述べる。

3.1. 命題内容が話し手にとって「自明」のことである

まず、(17a) に示した、「命題内容が話し手にとって「自明」である」とはどういうことかを説明する。ここでいう「自明」という用語は、「独り言」について分析した森山 (1997) に基づいている。森山は、「独り言」とは、話し手の心的情報活動、平たく言えば「思考展開」を表すものだと述べている。そして、発話の瞬間において、話し手の思考や認識において何の変化も伴わない、話し手にとってはわかりきったこと、つまり「自明」のことを言う場合、それは話し手の思考展開を表さないため、独り言では使えないのだと述べている。

(18) 私の名前は太郎だ。　(森山 1997:175)

例えば、(18) は普通、独り言で言うことができない。それは、話し手にとって自分の名前というのは改めて考えるまでもない「自明」のことだからである。しかし、次の (19) のような文脈なら、独り言としても成立する。

(19) 私の名前は太郎だ。ということは、弟がいたら名前は二郎だろうな。

この場合、自分の名前について話し手が考えをめぐらせているため、(19) は話し手の思考展開を表す文となり、独り言でも言えるのである。ここで森山が「既知」ではなく「自明」という用語を使ったのは、単にその情報を「知っている」ことが必ずしも「自明」だとは

限らないからである。実際、上の（18）と（19）では、「私の名前は太郎だ」という情報は、どちらも話し手にとって「既知」のことである。しかし、（19）の場合、その情報が後に続く「ということは、弟がいたら名前は二郎だろうな」という発話の前提として再認識されている。言いかえると、その場で活性化されているのである。一方、（18）の場合、「私の名前は太郎だ」という情報が再認識されるような状況にはなく、その場で情報が活性化されているとは言えない。それは、既にその情報が話し手の頭の中にあり、再認識する必要がないからである。このように、同じ「既知」の情報でも、「自明」かどうかという点に違いがある。ただ、これは「独り言で言えるかどうか」という問題に即した説明なので、本稿で扱う問題に即して、もうひとつ例を挙げて説明しよう（次の例文は筆者の作例）。

（20）A：おめでとう。はい、これプレゼント。
　　B：え、何が？
　　A：何って、今日は誕生日でしょ？
　　B：そうだ、今日は僕の誕生日だった。
（21）A：で、今年は何くれるの？
　　B：は？何が？
　　A：何って、今日は私の誕生日だよ。
　　B：あ、そういえばそうだった。忘れてたよ。

（20）の会話において、BはAに言われるまで、今日が自分の誕生日だということを忘れていた。自分の誕生日を知らなかったのではなく、忘れていた、あるいは意識していなかったというわけである。この場合も、「既知」ではあるが「自明」ではない。一方、（21）において、Aは下線部の発話の前に、今日が自分の誕生日だということは認識しており、この時点で「自明」になっている。つまり、（20）のBと（21）のAは、「今日が自分の誕生日である」とその場で認識したか、既に意識していたかという点で違うのである。

以上のように、ここでいう「話し手にとって「自明」のこと」とは、発話の瞬間に、話し手が考えたり、認識しなおしたりせず、「既に認識済みのこと」「考えるまでもないこと」のことである。大阪方言のデは、そういった「話し手にとって「自明」のこと」を聞き手に伝える場合にのみ使えるのである。以下で、例に即して説明する。

（22）さっき天気予報見たけど、今日雨やデ。
（23）（天気予報を見ながら）#あ、明日は晴れやと思ってたけど、やっぱり雨やデ。
（24）A：お父さん見てへん？
　　B：さっきでかけたデ。
（25）A：お父さん見てへん？
　　B：?お父さん？そういえばさっき、えーっと…あ、そうそう、どっかでかけてたデ。
（26）（家の外から中にいる人に向かって）
　　おーい、雨降ってきたデ。
（27）（屋外で隣にいる人に向かって）
　　?あ、雨降ってきたデ。

(22) では、この発話の前に天気予報で見た「今日は雨だ」という情報を、聞き手に伝えている。天気予報を見た時点で、話し手はその情報を受け取り、それを自分の知識として定着させている。したがって、発話時においてその情報は話し手にとって「自明」なのである。一方、(23) では、話し手が天気予報を見ながら、そこからの情報をそのまま口に出している。つまりこれは、話し手の中での認識の変化を言語化したものである。したがって、デをつけることはできない。

(24) では、父親の所在を尋ねられたBがすぐに「さっきでかけたデ」と応答している。この会話の少し前にBは父親がでかけるのを目撃した、あるいは父親本人からでかける旨を聞いたと考えられる。つまり、Aに聞かれた時点で、Bの頭の中に「父親はでかけた」という情報があり、それをそのまま聞き手に伝えただけなのである。したがって、発話時点でその命題内容は話し手にとって「自明」のことであり、デを付加できるのはそのためである。それに対して、(25) においては、(24) と同じ質問をされているが、Bはすぐには思い出せず、しばらく考えてから答えている。つまり、ここでは発話時に話し手の頭の中で「思い出す」という心的情報活動が行われており、その結果「父親はでかけた」という情報を思い出している。したがって、話し手にとって「自明」の情報ではなく、デを付加することもできない。とはいえ、絶対にデが使えないわけではない。例文に?をつけたのはそのためである。同様のことは (27) にも言えるので、そのときに詳しく述べる。

(26) では、家の外にいて、雨が降っていることを知っている話し手が、家の中にいてそのことを知らない聞き手にそれを教えている。この場合、デが使える。一方、(27) では「あ」で始まっていることからもわかるように、話し手は発話時に「雨が降ってきた」ということに気付き、それをそのまま口に出している。やはりこの場合、デは使えない。

だが、(25) でも触れたが、(25) (26) (27) には、「発話時に話し手にとって「自明」」ということに関して少し問題がある。これらに共通するのは、当該の命題内容が話し手の中に定着した時点と発話時とが非常に近いということである。デが使われるのは、(24) のように、話し手が、聞き手に伝える情報を発話時よりも前に「自明」のものとしていたことが明確な場合が多い。例えば、次のような例も同様である。

(28) A：あれっ、ここにあった段ボールどないした？
　　B：あれやったらさっき運んどいたデ。
(29) A：エビとかカニ苦手やったよな？
　　B：いや、普通に好きやデ。

(28) において、Bが段ボールを運んだのは「さっき」のことであり、Aに聞かれて特に考えることなく答えていることからもわかるように、「さっき運んどいた」という情報は、今さっき行った自分の行動として覚えており、改めて思い出す必要のない「自明」なことである。(29) も同様で、エビやカニが嫌いだとなぜか誤解されているBが、自分はエビもカニも好きだと言っている場面だが、「エビやカニが好きだ」という情報は、話し手にとってはこの発話の前から確定していることであり、その場で再認識したことではない。これが、食わず嫌いだったが、食べてみたら好きだった、という場合は、「自明」ではないため、デは使えない。これら2つの例や (22)、(24) は、話し手による当該事態の認識が、

発話時よりも前である。

一方、(27) のような場合、「雨が降ってきた」という状況の認識と発話がほぼ同時だと解釈できるため、デは使いにくい。しかし、状況を認識してから発話したとも考えられるため、発話時においては、「雨が降ってきた」というのは話し手にとって「自明」である。(27) がやや不自然ながら非文でないのはそのためである。

しかし、重要なのは状況の認識と発話の時間関係そのものではなく、話し手がどう見せたいかということである。例えば、(27) の場合、デを使うと、「雨が降ってきた」という事態を、発話時には既に認識していたのだという態度で示すことができる。たとえ「今気付いた」ことであっても、少し前から知っていたかのように見せるために、デをつけて発話するのである。つまり、(27) のような場合にデを使うのは、デ本来の性質から派生したストラテジックな用法であると思われる。これと逆のことが、ワの場合にも起こる。詳しくは§4.1 で述べる。

以上のように、大阪方言のデには、付加された命題が話し手にとって「自明」のことであるということを示す機能があることを見た。繰り返すが、ここでいう「自明」とは、発話時よりも前に知っていたり、認識していたりして、思い出したり考えなおしたりする必要がないという意味である。

3.2.　聞き手が認識するべきものである

(17) に示した、デの基本的な意味として重要な要素の 1 つは、前節で述べた、「命題内容が話し手にとって「自明」のことである」ということであった。そしてもう 1 つは、「その命題内容を、聞き手が認識するべきものとして伝える」ということである。本節ではこのことについて詳述する。

まず、冒頭でも述べたように、デは独り言で使えない。これは、聞き手に伝えるのがデの主要な機能であるためである。

(30)（独り言で）#あ、雨降ってきたデ。　　((5) 再掲)

(31)（独り言で）#あー、もうしんどいデ。　　((6) 再掲)

しかし、独り言ではない平叙文は、基本的に聞き手にその内容を認識させよう、わかってもらおうとして発話される。では、そのような文すべてでデが使えるのかというと、そうではない。ここでいう「聞き手が認識するべきもの」とは、その発話によって聞き手が思い込みを正したり、何らかのアクションをとったりさせるという内容である。

(32) 靴ひもほどけてるデ。

(33)（寝ている人を起こしながら）ほら、もう 8 時やデ。

(34) A：おまえ、今月誕生日やんな？

B：ちゃうちゃう、来月やデ。

例えば、(32) では、靴ひもがほどけているということを聞き手に伝えることで、ほどけた靴ひもを結ばせようとしている。この発話において、話し手は既に聞き手の靴ひもがほどけていることに気付いており、聞き手が結びなおさなければならないと考えている。しかし、直接結べと命令しているわけではない。これは、デが命令文で使えない（§2.2）とこ

ろにも表れている。(33) も同様で、今の時刻がもう 8 時だと聞き手に伝えることで、聞き手に起きるように促している。(34) では、誕生日が今月であるという聞き手の記憶違いを正そうとしている。この場合、デがなくても会話は成立するが、デをつけることで、一方的に聞き手に再認識を迫るのではなく、情報を聞き手に届けた上で、再認識するのはあくまで聞き手がすることだという態度を示すのである。

ただし、「聞き手に何らかのアクションを起こさせる」「聞き手の思い込みを正させる」というのは、デそのものが持つ機能ではなく、デを使用することによって生じる語用論的なニュアンスである。デの基本的な機能は、聞き手が認識するべき（と話し手が思っている）情報を、聞き手に届けるということである。ここで「届ける」という表現を用いたのは、デを付加することで、一方的に情報を伝達するだけでなく、伝達した後の聞き手の反応をうかがうような傾向を示すことがあるからである。例えば、次の (35) では、最初の A の発話でデを用いたことによって「おまえに頼まれていた本を持ってきたが、どうするのか」という態度を示している。そして、次の B の発話では、デをつけることで「コピーさせてもらうが、構わないか」と、より反応をうかがう発話になっている。

(35) A：頼まれてた本、持ってきたデ。
B：ありがとう。ほな今からコピーさしてもらうデ。
A：うん、かめへんよ。

したがって、ターンを維持したまま自分の体験や感想を述べる場合、デは使えない。

(36) #あんなー、こないだうちの大学の卒業式あったんやデ。それで、なんかゴレンジャーみたいなやつ着てるやつらがおったデ。

以上のように、聞き手からの反応があることを前提とした上で、つまり、「この情報を聞いたら、あなたは何らかの反応を示さなければならないのですよ」という態度で、聞き手に情報を伝達するのがデの特徴なのである。聞き手にアクションを起こさせるとか、聞き手の認識を正すとか、反応をうかがうといったことは、そこから生じる語用論的な効果である。このような、デにおける伝達のしかたの特徴は、ワの場合と対照することによってさらに明確なものになっていくので、§5.2 でも改めて述べる。

3.3. デが使えない場合

以上、デの基本的な意味・用法について、命題のとらえかたと伝達のしかたに分けて述べてきた。ここでは、前節までと重複する部分はあるが、デが使えない場合についてまとめる。デが使えないのは、大きく分けて、次の 3 つの場合である。

① 独り言
② 話し手がその場で考えたことや決めたこと
③ ナラティブにおける状況説明

以下、それぞれについて詳しく説明する。

3.3.1. 独り言

何回か繰り返してきたが、デは聞き手目当て専用の文末詞であり、聞き手に伝えること

を目的としない発話、つまり独り言では使えない。§3.2 で挙げた例をもう一度下に掲げる。

(30)（窓の外を見て独り言で）

#あ、雨降ってきたデ。　　((5) 再掲)

(31) #あー、もうしんどいデ。　　((6) 再掲)

また、(30) は、「あ、」で始まっていることからもわかるように、話し手が発話時にその場で認識したこと、思ったことであり、上の②にも当たる。

ただし、(30) の場合、デを使うこともできる[2)]。このような独り言にデをつけた場合、「聞き手を意識した独り言」とでも呼ぶべきものになる。この場合、典型的な用法からは外れるが、§3.1 の (27) と同じように、「聞き手よりも先に認識していた」ということを示すための、デのストラテジックな用法だと言える。しかし、(31) の場合はデを使うことができない。(31) における「しんどい」は話し手の内面の表出であり、聞き手よりも先に認識していて当たり前、というより、それしかありえないからである。そのような情報にデをつけても意味はない。したがって、次の (37) のように「しんどい」というのがより一般的な事象を示す場合、デを使うことができる。

(37) 今日中にこの課題全部終わらすのはちょっとしんどいデ。

(37) では、話し手が「しんどい」と言っているのではなく、今日中に課題を全部終わらせるということに対して「それはしんどいことだ」という評価を下しているのである。つまり、その評価は話し手でなくても下せるものであり、「しんどいからやめておけ」という意味でデをつけて発話することができる。

以上、派生的な用法を除いて、デは基本的に独り言では使えないということを述べた。

3.3.2.　話し手がその場で考えたことや決めたこと

これは、§3.1 で述べた、「命題内容が話し手にとって「自明」のこと」という特徴に反する場合ということである。

(38)（電話で）

A：今時間ある？

B：ごめん、今からちょっと出かけなあかんねん (出かけないといけないんだ)。1 時間ぐらいで帰ってこれるけど。

A：#そうなんか。じゃあ、また 1 時間ぐらいしたらかけなおすデ。

(39) #そうや、思い出した。印鑑は向こうの部屋やったデ。

(40) A：俺は焼き飯にするけど、おまえどうする？

B：#えーっと、じゃあ俺は天津飯にするデ。

(38) では、今は忙しいが 1 時間後なら大丈夫と言われた A が、それでは 1 時間後に電話をかけなおすということをその場で決めている。B の発話を受けて「じゃあ」と言ってい

2)　このような「独り言のデ」は、これまでに述べてきたデとは違って、下降調の文末イントネーションをとる。これまでのデはすべて上昇調である。しかし、上昇調でも下降調でも、デに共通する意味・用法があるし、本稿ではデとワを対照させるのが目的なので、デのとるイントネーションには本稿では言及しない。

ることからも、その場で決めたのだということがわかる。この場合、「1時間後にかけなおす」という命題内容は、話し手にとって「自明」のことではなく、今決めたことであり、デが使えないのはそのためである。(39) と (40) も同様で、「そうや、思い出した」「えーっと、じゃあ」といった表現からわかるように、これらは「今思い出したこと」「今決めたこと」であり、発話時の話し手にとって「自明」のことではない。

ただし、(38) の場合、デを使うことも可能である。しかしその場合、発話の意味合いが異なり、「1時間後に電話をかけなおすが、それで構わないか」と相手に確認するような発話になる[3]。これは、§3.1 でも述べたように、今考えたことを、前からわかっていたかのように表現する用法である。そして、そのことを聞き手に伝えて反応をうかがっているのである。

以上、話し手がその場で決めたことや考えたことをそのまま言語化する場合、デは使えないということを示した。

3.3.3. ナラティブにおける状況説明

話し手が自分の体験や感想を述べるナラティブの冒頭で、その状況説明をする場合、デは使えない。§3.2 の (36) がその例である。

(41) #あんなー、こないだうちの大学の卒業式あったんやデ。それで、なんかゴレンジャーみたいなやつ着てるやつらがおったデ。 ((36) 再掲)

(41) でデが使えないのは、この発話が聞き手の反応を期待してなされたのではなく、まだ話し手がターンを維持して話を続けようとしているからである。また、聞き手が反応するような発話になるためには、聞き手との共有知識や共有体験がなければならない。

(42) こないだ卒業式行ってきたデ。

例えば、(42) が適切な発話として成り立つためには、「話し手は卒業式には行かないと言っていた」という共有知識が、話し手と聞き手との間になければならない。その場合、以下のように会話が続いていくと思われる。

(43) A：こないだ卒業式行ってきたデ。
B：あれ？行かんって言ってなかった？
A：おまえが行け行けってうるさいから行ったんや。

以上のように、聞き手との共有知識がなく、話し手がそのまま話を続けていく、状況説明においては、デが使えないのである。ちなみに、同じような特徴を持つ文末詞に、山形市方言のジェがある（渋谷 2008)。ジェもデと同様に、次の (44) (45) のようなナラティブにおける状況説明では使えない。

(44) #きのう、七日町に行ったんだけど、そこで太郎に会ったんだジェ。

(45) #この前、用事でちょっと仙台まで行ったんだジェ。 (以上、渋谷 2008:6)

渋谷によると、こういう場合にジェが使えないのは、ジェが聞き手の思い込みを修正するために使われる形式だからであり、聞き手に何らかの思い込みがあることを想定すること

3) もしくは、「相手の都合が悪かったら1時間後にかけなおす」ということを事前に決めていたという場合も考えられる。

がない状況説明においては、ジェがそぐわないからである。この点はデと異なる。§3.2 でも触れたが、「聞き手の思い込みを修正する」というのはデの本質的な機能ではない。平たく言えば、「聞き手にとって必要な情報だ」「この情報を受け取ったら、聞き手はすぐに何らかの反応をするだろう」という情報を聞き手に伝えるのがデの中心的な機能である。「聞き手の思い込みを修正する」というのは、その一部にすぎない。したがって、聞き手の思い込みを修正するのが中心的な機能であるジェが使えない次のような例では、デが使える。

(46) A：(テレビで天気予報を見ていた人に) あしたの天気、何？
　　B：雨 {#ダジェ／ヤデ}。
(47) A：君、いつ東京に行くの？
　　B：あした {#ダジェ／ヤデ}。　　(以上、ダジェについては渋谷 2008:6)

このような、質問に対する応答というのは、相手の事前の思い込みを想定する状況ではないため、ジェが使えない (渋谷 2008:6) が、デは必ずしも相手の思い込みを修正するわけではないので、単に質問に答える場合でも使えるのである。ただし、(46) や (47) のような場合にデを使うと、「なんでそんなことを聞くの？」という含意が生じることがある。これは、デを付加した発話が相手の反応をうかがうという前提でなされるためである。

4.　ワの意味・用法

ここからは、ワの意味・用法について記述していく。詳しい対照は§5 で行うが、基本的に§3 におけるデの記述と対応させて記述していく。まずは (45) にワの基本的な意味をまとめる。

(48) ワは、
　　a.　当該命題の内容が話し手がその場で考えたり知ったりしたことであり
　　b.　それが話し手の領域にとどまっている
　　ということを表す

以下、(48) の a と b について詳しく説明する。

4.1.　話し手がその場で考えたり思ったりしたことである

ワを付加できるのは、その命題内容が、話し手が既に気付いていたり、考え直すまでもないことではなく、発話時に話し手が考えたり思い出したりしたことである場合である。

(49) (料理を食べて) あ、これめっちゃうまいワ。
(50) (食堂の行列を見て) このぶんやったらだいぶかかるワ。時間ずらそ。
(51) ほな、あとは俺がやっとくワ。ちょっと休憩し。

(49) は、料理を食べてその場で思ったことをそのまま言語化したものである。(50) は、長い行列を見て、自分の番までかなりかかりそうだと判断したものである。そして、(51) は、仕事の進み具合などから判断して、もうあとは自分がやるからと聞き手に言ったものである。これらに共通するのは、ワの付加された命題内容が、発話時に話し手が思ったこと、考えたことであるということである。「あ」や「ほな」といった表現が共起しやすいのもそのためである。

したがって、話し手がその場で考えたり思ったりしたことではなく、前から知っていたこと、考えるまでもないことにワをつけることはできない。

(52) A：おまえ、今月誕生日やんな？

B：#ちゃうちゃう、来月やワ。

(53) #さっきからずっと気になってたんやけど、チャック開いてるワ。

(52) の自分の誕生日は既に知っていることだし、(53) では「さっきからずっと気になってたんやけど」という前置きから、チャックが開いているというのは話し手が今気付いたことではないということがわかる。こういった場合、ワは基本的に使えないのである。

ただし、デの場合と同様に、ワにもストラテジックな用法が存在する。既に知っていたのに、ワをつけることで、さも今気付いたかのように言う用法である。

(54) (言いにくそうに) なあ、その、チャック開いてるワ。

(55) (天気予報を見ていない人に) さっき天気予報見たけど、今日雨やワ。

(54) では、相手のチャックが開いていたことには既に気付いていたものの、それをストレートに言うのは憚られるので、ワをつけることでまるで今気付いたかのように言っているのである。(55) では、発話時よりも前に天気予報で知った情報なので、デをつけても問題ないのだが、デをつけて発話すると、情報量の点で話し手が聞き手よりも上に立つことになり、押しつけがましさを伴うことがある。それを避けるために、ワをつけて今知ったことであるかのように言っているのである。

また、(52) で、ストラテジックな用法としてワが使える場合があるが、こちらは聞き手目当て性に関わってくるので、次節で述べる。

以上、ワが付加される命題は、発話時に話し手が考えたり思ったりしたことであるということを述べた。

4.2. 話し手の領域にとどまる

ここでいう「話し手の領域にとどまる」とは、言いかえれば、必ずしも聞き手目当てではないということである。つまり、ワを付加した発話は、デのように必ずしも聞き手に伝えようという発話ではないのである。そのため、ワは独り言でも使える。

(56) (独り言で) あ、雨降ってきたワ。 ((5) 再掲)

(57) (独り言で) あー、もうしんどいワ。 ((6) 再掲)

(57) は発話時における話し手の感情をそのまま言語化したものであり、(56) では使えたデも (57) では使えない (§3.3.1)。独り言は話し手の思考をそのまま言語化したものであり、ワと相性がいい。

また、ワを付加した発話は話し手の領域にとどまるので、「これはあくまで私の個人的な意見だ」というニュアンスを伴うことが多い。

(58) A：お、これうまいワ。

B：そう？俺はちょっと苦手な味やワ。

(59) A：お父さん見てへん？

B：いや、見てへんワ。トイレかどっかちゃうん？

（58）ではワが2回使用されているが、どちらも自分の個人的な感想や好みを述べる発話になっている。ワはこういう個人的なことを言うのによく使われる。（59）では、父親の所在を尋ねられたが知らないと答えているが、ワを付加することで「他の人はどうか知らないが、自分は見ていない」というスタンスを表しているのである。

さらに、「話し手の領域にとどまる」「あくまで自分のことだ」という意味から、聞き手を突き放すようなニュアンスを伴うこともある。

（60）（出かける準備がなかなか終わらない相手に対して）
もうええワ。先行っとくワ。

（61）A：やばいやばい、どうしよ？
B：知らんワ。自分で考えろ。

（60）は、なかなか準備が終わらない相手にしびれを切らせての発話だが、ここでワをつけることで「私は勝手にする」というニュアンスを出している。（61）も、助けを求める相手に対して、「知らんワ」と答えることで突き放しているのである。

この「突き放し」のニュアンスを用いた派生的な用法に、次のようなものがある。

（62）A：おまえ今月誕生日やんな？
B：ちゃうワ。来月やってさっき言ったやんけ。

（63）A：さぼってんと（さぼってないで）勉強しろよ。
B：おまえに言われんでもわかってるワ！

ここでワが付加されている「私の誕生日は今月ではない」「おまえに言われなくてもわかっている」という命題内容は、話し手が発話時に考えたことではなく、既に話し手の頭の中にあることである。それなのにワが使われるのは、「突き放し」のニュアンスを出すためである。「発話内容が話し手の領域にとどまる」ということから「聞き手を遠ざける」というニュアンスが派生し、それが（62）や（63）のような、相手に反発するような発話に用いられるようになったのだと考えられる。

以上のように、ワを用いた発話は、あくまで話し手の領域にとどまり、必ずしも聞き手に伝えることを目的としない。そのため、「個人的な意見だ」「突き放す」といったニュアンスを伴うことがあるのである。では、ワはまったく聞き手を意識していないのかというと、そうでもない。確かに、独り言のように聞き手が意識されない場面でワが使われる場合もあるが、「突き放す」というのは聞き手を意識してのことだし、§4.1の（51）のような例は、明らかに聞き手に対して向けられたものだと言える。つまり、ワが付加された発話は、聞き手を意識していないのではなく、いわば聞き手から一歩引いた伝え方をするのである。これに関しては、デの場合と対比するとその特徴がより明確になるので、§5.2で詳しく説明する。

4.3.　ワが使えない場合

ここまで、ワの意味・用法について、デの場合と同様に、命題のとらえ方と伝え方の面から記述してきた。ここでは、ワが使えない場合についてまとめる。ワが使えないのは、命題内容が「話し手が既に知っていること」の場合である。これはいわば§4.1の裏返しで

あり、既にそこで述べたことなので、ごく簡単にまとめる。

(64) #私の名前は太郎やワ。

(65) #さっきからずっと気になってたんやけど、チャック開いてるワ。((53) 再掲)

(64) において、自分の名前を話し手が発話時に初めて知るということは、普通は考えにくい。また、(65) では、「さっきからずっと気になってた」と言っているので、そのとき気付いたことではないということがわかる。こういった場合、ワは使えない。ただし、これも§4.1 で述べたが、前から知っていたことなのに、まるで今知ったかのように表現する場合には、ワが用いられることがある。

ちなみに、§3.3.3 で述べた、ナラティブによる状況説明も、やはり話し手が既に知っていることなので、ワは使えない。

(66) #あんなー、こないだうちの大学の卒業式あったんやワ。それで、なんかゴレンジャーみたいなやつ着てるやつらがおったワ。 ((36) 再掲)

なお、§4.2 の裏返しとして、「聞き手の反応を前提として聞き手に向けられた発話」という場合が考えられる。しかし、本当は聞き手に向けているのに、ストラテジックにワを使っていると解釈すれば自然になる場合がほとんどだし、聞き手への向き方は、先ほど§4.2 の末尾でも述べたように、デとワを対比することでその特徴が明確になるため、聞き手目当て性について「ワが使えない場合」という例を示すのが難しい。したがって、ここでは、ワが使えないのは、「話し手が既に知っていることを命題内容とする場合」としておく。

5. デとワの異同

ここからは、§3 と§4 で記述した、大阪方言の文末詞デとワの意味・用法を対照させていく。そうすることで、両者の特徴をより明確にする。対照に当たっては、§3 と§4 の構成と同様に、命題のとらえ方 (§5.1) と情報の伝え方 (§5.2) の 2 つの面に分けて述べていく。

5.1. 命題のとらえ方

本節では、§3.1 と§4.1 で述べたことを再びまとめて、命題のとらえ方という面におけるデとワの違いを明らかにする。

命題のとらえ方における両者の違いは、発話時より前に既に認識していたか、発話時に認識したかということである。

(67) A : 2006 年のオリンピックってどこやったっけ？
B : イタリアのトリノや {デ／#ワ}。イナバウアーのやつやんか。

(68) A : 2006 年のオリンピックってどこやったっけ？
B : えーっと、どこやったかな…（インターネットで調べて）あ、せやせや、イタリアのトリノやった {#デ／ワ}。

例えば、(67) の場合、B は前回の冬のオリンピックの開催地を尋ねられて、すぐに答えている。「イナバウアーのやつやんか」と付け加えていることから、この時点で B の頭の中に「前回の冬のオリンピックの開催地はトリノ」という情報があり、それをそのまま聞き手に伝えたものだと考えられる。このように、発話時に既に話し手が知っていた、認識し

ていたことをそのまま聞き手に伝える場合、デは使えるがワは使えない。一方、(68) では、同じ質問をされているが、B も覚えていないため、インターネットで調べている。そして、それに続く発話は、オリンピックの開催地について思い出したのとほぼ同時に起こっている。つまり、思い出したのをそのまま言語化しているのである。このように、発話時に話し手が考えたこと、思い出したことをそのまま言語化する場合、ワは使えるがデは使えないのである。

もちろん、これはあくまでも基本的な性質であり、§3.1 と§4.1 でも述べたように、今知ったことなのにデを使うことによって、まるで前から知っていたかのように見せたり、逆に前からわかっていたのに、ワを使うことで、さも今気付いたかのように表現したりということもある。

したがって、デとワの意味が非常に接近するように思われる場合がある。次のような例がそうである。

(69) あ、財布落ちてる {デ／ワ}。

「あ、」で始まっているため、発話時における話し手の認識を表していると考えられ、ワは使えてもデは使いにくいと考えられる。しかし、§3.1 でも説明したように、発話時にその場で認識したことであっても、それをいったん認識した上で聞き手に伝えたのであれば、デも使える（重要なのは、実際にそういった処理を頭の中で行ったかどうかではなく、聞き手にどう見せたいかである)。このような場合、デもワも使えるが、どちらを用いるかで意味が大きく変わってくる。デを使った場合、財布が落ちているということを既に知っているというスタンスに立った上で、聞き手にそのことを伝える発話となる。一方、ワを使った場合、財布が落ちているのに今気付いたということを示す発話となる。両法使えても、このように意味の面で違いが現れてくるのは、デとワそれぞれの命題のとらえ方が異なるからである。

以上、デとワは、命題のとらえ方が、前者は「発話時に既に気付いていたこと」、後者は「発話時に気付いたこと」であり、対照的になっているということを述べた。

5.2.　聞き手への伝え方

これもまた§3.2 と§4.2 で述べたことのまとめになるが、デとワの「聞き手への伝え方」における違いについてまとめる。

「聞き手への伝え方」に関して両者の違いを簡単にまとめると、「聞き手に寄り添うか聞き手から離れるか」ということになる。例に即して説明しよう。

(70) もう行く {デ／ワ}。

(70) は聞き手に向けられた発話だとする。デを使った場合、「もう行くからおまえも早く準備しろ」という意味になることが多い[4]。つまり、聞き手も一緒に行くのである。一方、

---

4) ただし、次のように、聞き手が一緒に行かない場合でもデが使えることはある。話し手が家を出る前に、留守番をする聞き手に対して言った発話である。
・もう言い残したことはない？もう行くデ。
この場合も、「もう言い残したことはないか」と聞き手に確認をとっていることからもわか

ワを使った場合、聞き手は行かないのが普通である。このように、デは「聞き手に寄り添う」が、ワは「聞き手から離れる」のである。

もう少し説明を加える。ここでいう「聞き手に寄り添う」「聞き手から離れる」というのは、聞き手を含めるか否かということだけではない。

(71) 母親：明日の宿題はできてるんか？
　　子供：明日は日曜日や｛デ／#ワ｝。まだせんでも大丈夫や。

(72) 母親：明日の宿題はできてるんか？
　　子供：何ゆーてんねん！明日は日曜日や｛#デ／ワ｝。

(71) と (72) は基本的に同じ会話だが、子供の反応のしかたが違う。(71) では単に「明日は日曜日だからまだ大丈夫」と言っているが、(72) では、誤った認識に基づいて宿題をするように迫ってきた親に対して、反発するように「明日は日曜日だ」と言い返している。前者ではデが使えてワが使えないのに対して、後者では逆にワが使えてデが使えなくなっている。これは、§4.2 の (62) (63) で述べた、ワの持つ「突き放し」のニュアンスによるものである。(71) では、明日は日曜日だということを忘れている母親に、そのことを思い出させようとして言っているのだが、(72) では、親に反発する気持ちから、聞き手に正しい情報を教えてやるのではなく、聞き手から逆に離れているということを表すために、デではなくワを用いているのである。

以上のように、ワは「聞き手から離れる」という性質を持っているため、デに比べて「反発」や「突き放し」のニュアンスを伴いやすい。それに対して、デは「聞き手に寄り添う」性質を持っている。このことに関して、もう少し説明を加える。

(73) 大丈夫？何やったら、もうあとは俺がやっとく｛デ／#ワ｝。休憩したら？
(74) ほな、あとは俺がやっとく｛#デ／ワ｝。もう休憩し。

(73) では、「休憩したら？」と相手に持ちかけているが、(74) のように命令しているわけではない。デはあくまで相手の反応があることを前提にしているので、(73) のように「休憩したら？」と、相手に決定権を持たせた勧めの場合は使えるが、(74) のように連用形命令を用いた、聞き手に決定権がない場合には使えない[5]。一方、ワは聞き手の反応をうかがうというようなことはなく、むしろ話し手が一方的に聞き手に伝えるという特徴があるので、聞き手に選択権を持たせた (73) のような場合には使えず、(74) のように一方的に命令するような場合に使える。このように、聞き手に選択権を持たせるのか、一方的に決めてしまうのかという違いが出るのは、聞き手に寄り添うか聞き手から離れるか、より厳密に言えば、聞き手からの反応を前提としているか、一方的に聞き手に伝えようとしているだけかという、デとワ本来の違いがあるからである。

ちなみに、デとワの本質的な意味の違いは、ポジティブフェイスに配慮するかネガティ

るように、やはり聞き手に寄り添うような表現になっている。

5) 牧野 (2008) によると、大阪方言の連用形命令は、次のように「頼むから」という表現と共起しないため、聞き手に選択権がある〈依頼〉ではなく、聞き手に選択権のない〈命令〉であるという。
　a. 何してるの、さっさと起き。
　b. *頼むから、あっちへ行き。　　(牧野 2008:59)

ブフェイスに配慮するかという観点からもまとめられる。聞き手に寄り添って反応をうかがうデはポジティブフェイスに配慮し、聞き手には関係なく、これはあくまで自分の意見だからというニュアンスを伴うワはネガティブフェイスに配慮すると言える。(73) と (74) にはそれが表れていると言える。

反面、聞き手の領域に踏み込むデは「押しつけがましい」、聞き手から離れるワは「冷たい」というニュアンスを伴うこともある。

以上、「聞き手への伝え方」に関して、デとワの違いをまとめた。その違いを一言でまとめると、「聞き手にどれだけ関わるか」ということである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、大阪方言の文末詞デとワについて、その意味・用法を、特に「命題のとらえ方」「聞き手との関わり方」の 2 つの面を対照させながら記述した。本稿で明らかにしたことをまとめると下の表 1 のようになる。表 1 を見てわかるように、また、本稿の冒頭でも述べたように、デとワは、2 つの面で対照的な性質を持っている。が、対照的な性質ばかりでなく、共通点もある。§4.3 の (66) のような、ナラティブによる状況説明の場合、両者とも使えないというのがその 1 つである。また、形式の面でも、ワはナと共起できるのに、デはできない (§2.1 参照) という点で、デとワが完全に対照的であるとは言えない。この問題を説明するには、まずはナの意味・用法を記述する必要がある。それについては、今後の課題としたい。

表 1 デとワの意味の違い

	デ	ワ
命題のとらえ方	発話時以前に話し手が知っていた、気付いていたこと	発話時に話し手が知った、気付いた、再認識したこと
聞き手との関わり方	聞き手の領域まで踏み込み、聞き手からの反応があることを前提として伝える。聞き手に寄り添う。	聞き手からの反応は前提になく、一方的に伝える。聞き手から離れる。

【参考文献】

渋谷勝己 (2008)「山形市方言の文末詞ジェ―ヨ・ズ・バと対比して―」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.1-13, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

牧野由紀子 (2008)「大阪方言における命令形の使用範囲―セエ・シ・シテをめぐって―」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.55-74, 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室.

森山卓郎 (1997)「『独り言』をめぐって―思考の言語と伝達の言語―」川端善明・仁田義雄編『日本語文法　体系と方法』pp.173-188, ひつじ書房.

のま　じゅんぺい (大阪大学大学院生)

dpgcn317@kawachi.zaq.ne.jp